

蕪村の俳諧（一）

白井田，敏雄
岡山県立天城中学校

<https://doi.org/10.15017/10582>

出版情報：九大國文學. 2, pp.1-30, 1931-10-05. 九大國文學研究會
バージョン：
権利関係：

蕪村の俳諧 (一)

白井田敏雄

一

芭蕉蕪村二家に對する讚否兩論の起伏は、今日に迫んで尙ほわれわれの周圍に聞く所である。此の事は、蕉村二家が、如何に相異なる世界を持つて俳諧史上に輝く作家であるかを有力に語つてゐるものではあるが、凡そ、各々独自の世界を持つ兩作家を拉し來つて、一に與するの故に他に許すに吝なる態度は、私にとつて、全く謂れなき事である。われわれが、多くの作家を眺め、作品を鑑賞してゆく時に、何よりの怡悦を齎らして呉れるものは、個々の作品によつて個々に示される多様な世界であり、個々の作家に依つて生活せられたところの個々の生命の多様さである。俳諧史上に忘れられてしまつた作家や、冷遇されてゐる作家にも、まづしい乍ら独自のなるものを藏してゐる筈である。私は或る安らかな悦びなしに是等の作品を見る事は出来ない。若し同一色に塗りつぶされた多くの作家があるとしたら、假令それ等が、如何に卓抜なる地歩を許されてゐるとしても、私に於て、極めて退屈なる存在でしかない。斯うした立場から眺める時、特に、蕪村の存在は饒かなる興趣を喚り、重大な意味を持つて來るやうに思はれる。

圓融自在なる俳諧の道を生活した芭蕉には、終に受生の本望を實現した事の、靜かな喜びがあつた。私が彼の作品を眺めてゆく時に、私の心を浸すものは、彼の作品になすり込められた此の喜びである。固より彼の殘して行つた世界は大いなるものであつた。が今日に於ては、是が解釋は遍くゆき亘つて居り、寧ろ、群議衆論いささか煩を加ふる觀がないでもない。靜かなる一筋の道を歩んで行つた芭蕉に對して、蕪村はどうであつたか。俳人蕪村の胸中には、彼にとつての大いなる先行者芭蕉への絶えざる憧憬があつた。と同時に半面に於ては、彼自らの賦性に依據して、獨自の俳諧を成就しようとのやみ難き意欲があつた。此の二律背反的な相克の、險難な道を歩み乍らも、蕪村は竟に蕪村自らの世界を開拓する事が出來た。では、此の蕪村によつて拓かれた世界が、如何に興味を繋ぐに足り、重大な意味を語るものであらうか。これに就ては、たゞ彼蕪村の作品に據つて論ずるの他は無いのであるが、此事に觸れゆく前に、序論的に、一二の問題にふれておかうと思ふ。

蕪村は、俳諧に於て、繪畫に於て、共に史上に一時期を劃する作家であつた。蕪村の藝術を論ずるとならば、固より其の畫俳兩道に亘つて、縦横の考覈が試みられなければならない。美を表現するにあつて、色彩に表現の具を借りようと、言語に之を求めようと、作者の感得した美の本質に於て、さしたる動きがあらうとは思はれない。只、前者の場合が、より具象的であり、後者の場合がより象徴的であるといふに過ぎない。従つて、蕪村の俳諧を解釋するに方つても、其の繪畫を顧みない事は、明かに半面的な毀りを免れ難いであらう。といふやうな事が云はれるかも知れない。けれども私は云ひ度い、繪畫はあく迄も繪畫であつて、所詮、俳諧ではあり得ない、と。俳人としての蕪村の疊りなき資質はたゞ彼の俳諧上の作品に依つてのみ眺める事が出来る。概念的な言ひ方をするならば、彼の繪畫に

於て看取し得る美の世界は、彼の俳諧の世界にも通ふものがあるであらう。けれども、それが爲に、俳諧の鑑賞に於ても繪畫を顧みなければならぬといふ事にはならない。況んや、繪畫より得來つた概念を以て俳諧に臨まうとするのは、明かに一種の方便的な機械論的な見解から脱してはゐないと思ふ。

蕪村の生涯に關しては、未だに疑問符のまゝに残されてゐる部分が多く、到底その方面に於てのわれわれの期待に添ひ難いものがある。俳人蕪村の面目を全き姿に於て把握せんが爲には、彼の全き傳記を顧みななければならぬ、と云ふ主張が聞かれるが、私は與し難い。云ふ迄もなく、蕪村が歩んで行つた長い生涯の逢遭閱歷は、私にとつても、深い暗示を與へるし、止み難い興味の對象でなければならぬ。蕪村には果して如何なる血が受繼がれてゐたのであらうか。彼自らの人格を築き上げる爲には、如何なる運命が伴つたか、又如何なる偶然性が彼を苦しめたのであらうか、斯うした彼の足跡を曠なく尋ね求めるといふ事は、或は單なる知的興味の對象とのみは言へないかも知れない。けれども、斯うした事實を、如何に委曲を盡して知悉し得たとしても、それは蕪村の俳諧を鑑賞した事にはならない。藝術は人格の反映であり、生活上の事實もまた具體化された人格であらう。だが、それ故に、蕪村俳諧の鑑賞の上にも、傳記的知識が顧みられねばならないと云ふ事にはならない。況んや傳記的知識を携へて俳諧の鑑賞に臨まんとするが如きは、亦一種の方便的な機械論的な見解と見なければならぬ。

蕪村が生きたのは、享保から天明に亘る六十八年であつた。此の間に於て、蕪村の周圍に如何なる社會が動いて行つたか。如何なる思想が當時を支配してゐたか。文學的に如何なる思潮が隆替したか。そして、それ等と蕪村俳諧との間に如何なる交渉が見られるか。漢詩文との間には如何なる程度の關係が存するか。等々の事實を精細に検討す

るに非ざれば、また蕪村俳諧は論じ難い、といふ見解が餘り屢々聞かれる所である。斯る立場も、私は一議には讃し難いと思ふ。蕪村俳諧に影響したあらゆる時代の知識が穿鑿されたとして、それが蕪村俳諧の本質を動かす幾許の權威が有るのであらうか。

俳人蕪村の生命の曇りなき相は、たゞ其の俳諧上の作品に俟つ事に依つてのみ眺める事が出来る。言ふ迄もなく、蕪村の俳諧上の作品は、蕪村自らの俳人性の所産以外の何ものでもない。更に云はゞ、蕪村自らの作品を規定するのは、蕪村にはたらいだ純粹意志であつた。蕪村俳諧に取入れられたあらゆる表象は、此の純粹意志を通して構成せられた蕪村独自の理念の世界のもの、冷靜な意志的形式に於てせられたものは、自ら世界を異にしてゐる筈である。蕪村の周圍に動い所の、當時の文學上の思潮や、作風や、其他あらゆる時代的事象、それ等が蕪村の作品に取入れられてゐるとしても、右の如くに世界を異にして眺められねばならない。既に意志的形式以上の、純粹意志に依つて實現せられた俳人蕪村の生命である故に、一句々々には個々の生命が賦與せられ、過去の一句は俳人蕪村の過去の生命殘骸である。俳人蕪村の新しき生命より之をふり返つた時、蕪村にとつて、己が殘骸にも亦鑑賞上の怡悦が感ぜられたであらうし、反感や不快が感ぜられたであらう。斯うして實現せられた一句々々を、即ち、蕪村の俳諧性の不斷の活動と進展の跡を精細に辿る事に依つて、俳人蕪村の曇りなき相が眺められねばならない。そして又、こゝにて於て、既述した所の機械論的な、方便的な見解の無用な事も了解せられるであらう。視點を俳諧に極限して蕪村を解釋する事も、俳人蕪村の本質を規定するに方つて特に、試みらるべき筈の問題である。

私は、斯くて、あく迄も本質に即して蕪村俳諧を語らうと思ふ。蕪村の多くの作品に、親和の手をさし伸べなければ

ばならない。清潔なる感情と、新鮮なる感官とを傾けねばならない。そして、そこに享受さるゝ愉快と満足と悦びとが、必ずしも蕪村を動かした所のものに通ふものではないとしても、それは私に於て關與する所ではない。私は、私の眼を通して眺められたる所に就て語るの他はないであらう。

二

蕪村の俳諧は、一に彼の俳諧性の然らしむるところであり、其の俳諧性を透してのみ俳人蕪村の實相を把握し得るのであるし、又斯うした態度で私が蕪村に臨まうとしてゐる事は已に叙べて來た。こゝに於て、殘されてゐる今一つの問題に觸れておかうと思ふ。それは、彼蕪村が、俳諧に對して如何なる考へを有つてゐたかといふ事である。更に云はゞ、意志的形式に於て、蕪村に依り眺められたる俳諧如何の問題である。即ち彼の俳諧觀、俳論に就ての検討である。云ふまでもなく、俳論は俳諧ではない。けれども、蕪村俳諧を解釋するにあつて、何等かの準備的な問題があるなら、それは彼の俳論であらう。蓋し是は、彼の俳諧の素地を最も直接的に語るものであるからである。彼の俳諧への識見抱負を示すものであるからである。凡そ、自己の描ける理想と實際上の作品とが大きい隔りを見せてゐるといふ事は作家として淋しい事に違ひないし、斯る事は屢々あり勝な事である。自己の俳諧上の識見と實際作品との乖離に就ては、作家的修練の未熟や、本然的な自己の俳諧性の動きや、其他様々な理由が考へられるであらう。そして又斯く考へるに到つて、俳論などを検討する事の迂愚なるに思ひ到らぬでもないが、併し乍ら、前項に叙べたやうな單なる作品を繞る外的事情と同一列に考へてはならないと思ふ。

に眺められたか、そして又、蕪村が目標とした俳諧の世界がどんなものであつたかに就ての、凡その輪廓が浮んで来るやうに思ふ。

安永五年、一音法師著す所の「寂楽」に序した一文に於て蕪村は「はせをの翁の給ひけむ、ことはは俚俗にちかきも、こゝろは向上の一路に遊ぶへしとそ。これや一貫のをしへにして、千古の確言なるをや。」と云ひ、更に又「まことに蕉門の蘊奥は此ふみにとまりて、他にもとむべきことはあらしかし。世人さひといふはさひしきをいひ、しをりとは一句のなよらかなるをいふとのみこゝろうるは、ひかことにや侍ん。言をもて説うることもかたし、意をもてさとすへきことにこそ。されは其玄妙を了解したるとちむかひかたらんには、老のまさにいたるをもしらす、のちの世の一大事をもわするゝはかりうれしきわさになん侍れ。」とも語つてゐる。蕪村が、蕉門の、さび、しをり、をば大いなる憧憬を以て眺めてゐた事は、此の一文で見ても明瞭ではある。けれども、さて其の、さび、しをり、を果して如何に解釋したのであらうかと、右の一文が意味する所を穿鑿したところで、これだけでは到底明確な概念は探り得ない。私はこゝに、右の漠然とした一文から、二様の推斷的な答を得ておかうと思ふ。即ち、一は、假令明瞭な表現を取り得なかつたとしても、蕪村の心に於ては、かの風雅に徹した芭蕉の世界が納得されてゐた、今日われわれが芭蕉俳諧に對して下すやうな解釋を以て、凡そは臨んでゐたのであらう。といふこと。他は、芭蕉の風雅に徹した世界に對つて、之を逃避的に、半面的に解釋してゐたのではないか、といふことである。固より右の一文は頗る漠然としてゐるが、蕪村の心中何等かの解釋の方向は定まつてゐた筈である。とするならば、此の二様の推斷が示す方向の何れかであつたと見ておくの外はないやうである。

こゝに私は芭蕉のそれと關連的に蕪村の見解を眺める事にし度い。さうする事が、彼の特性を浮ばせるに有意義で、あり便宜的でもある。

扱て、蕪村は彼にとつての大いなる先行者芭蕉を如何に眺めたのであらうか。子規は其の「俳人蕪村」の末頁に於て「蕪村は鬼貫句選の跋にて其角、嵐雪、素堂、去來、鬼貫を五子と稱し、春泥集の序にて其角、嵐雪、素堂、鬼貫を四老と稱す。中にも蕪村は其角を推したらんと覺ゆ、「其角は俳中の李青蓮と呼ばれたるもの也」といひ「讀むたびにあかす覺ゆ、是其角がまされる所也」ともいへり。しかも其缺點を擧げて「其集も閱するに大かた解し難き句のみにてよきと思ふ句はまれくなり」といひ「百千の句のうちにてめでたしと聞ゆるは二十句に足らず覺ゆ」と評せり。自己が唯一の俳人と崇めたる其角の句を評して佳什二十首に上らずといふ、見るべし蕪村の眼中に古人なきを。其五子と稱し四老と稱す、固より比較的の讚辭にして、芭蕉の俳句といへども其一笑を博するに過ぎざりしならん。蕪村の眼高きこと此の如く、手腕亦之に副ふ。而して後に俳壇の革命は成れり。」と叙べてゐる。子規の此の一途的な蕪村への讚辭に就ては、一概に論じ去り難いものを其の動機に於て認めねばならないとしても、此の讚辭の決して當を得たものではない事は、蕪村の言説を一通り涉獵する事に依つて容易に認識し得る所である。尙又、是に對しては、先年小宮豊隆氏によつて精密な反駁が試みられたと記憶してゐる。従つて私は此點即ち、蕪村にとつて芭蕉は決して一笑を博する程度のものでなく、始終芭蕉への憧憬追慕の情を以て對した事に關しては繰返し叙べようとは思はない。芭蕉俳諧に於て、其の門人達の間にも區々なる解釋が下されてゐる所のさび、しをり、の説を蕪村は如何に解釋してゐたのであらうか、之に就ての蕪村の説を聞く事が出来るならば、憧憬追慕措かざりし芭蕉の相が蕪村に依つて如何

そこで更に進んで、翌安永六年「春泥句集」に序した蕪村の一文に就て見よう。此一文はかねて蕪村が門下の諸子と對論した事を録した「夜半茗話」から再録した旨蕪村自ら云つてゐるから、安永六年に成つたものではないが、自ら之を再録して序とする所よりして、しかく當年の彼の見解と背馳したものは思はれない。して見れば、「夜半茗話」に執筆當時から、當年にかけて、ずつと永く蕪村の心を領してゐた見解であるとも受取れる譯である。とにかく之に見るに「俳諧は俗語を用て俗を離るゝを尙ふ、俗を離れて俗を用ゆ、離俗ノ法最かたし。」と云ひ、又「畫家に去俗論あり、曰、畫去俗無他法、多讀書則書卷之氣上升市俗之氣下降矣、學者其慎旃哉。それ畫の俗を去たも、筆を投して書を讀しむ。況詩と俳諧と、何の遠しとする事あらんや。」と云ひ、更に又「其角を尋ね、嵐雪を訪ひ、素堂を倡ひ鬼貫に伴ふ。日々此四老に會して、はつかに市城名利の域を離れ、林園に遊ひ山水にうたけし、酒を酌て談笑し、句を得ることは専ら不用意を貴ふ。如此する事日々、或日又四老に會す、幽賞雅懷はしめのことし。眼を閉て苦笑し、句を得て眼を開く。忽四老の所在を失す。しらすいつれのところに仙化し去るや、恍として一人自イム。時に花香風に和し、月光水に浮ふ。是子か俳諧の境也。」と説いてゐる。蕪村は先に「寂葉」の序に於て、言葉は俚俗に近いが心は向上の一路に遊ぶのが俳諧だ、と説いた芭蕉の言を、千古の確言としてゐた。此の芭蕉の言は、蕪村に依ると、俗語を用ひて俗を離れる、といふ事になるらしいが、併し、こゝに云ふ離れる、といふ一語が如何なる意味を意味してゐるか、明かでない。けれども次に説かれてゐる、畫家の去俗論の一條が、可なり此の疑問を明かにして呉れるやうに見える。即ち、心を絶えず詩的鑑賞の世界に浸す事に依つて、市俗の氣を放下せよといふのである。常に俗界から逃避し名利の域より游離する事により己が心を美化せよといふのである。これが蕪村の俳諧への道であり、斯

して浮び來る美的な心境を逸する事なく「専ら不用意に」作りなされたもの即ち蕪村俳諧であつた。

こゝに於て、先に擧げておいた、二様の推斷的な答を顧みる時はどうであらうか。先の推斷の後者即ち、われわれが芭蕉俳諧に下さうとする解釋よりは、寧ろ、逃避的な、半面的な解釋を芭蕉俳諧に對して持してゐたものゝ如く、所詮先の第二の推斷に傾かざるを得ないと思ふ。

けれども、こゝに又斯うした事が言はれるかも知れない。「寂葉」の序に於ては只蕪村がさび、しをり、に就て述べたもの、「春泥句集」の序にては、蕪村自らが考へを披瀝したもので、兩者を一例に蕪村の芭蕉俳諧觀とするは如何と。が、之に就ては既に少しく觸れておいた通り、芭蕉の世界から截然と分離した蕪村の俳諧觀は到底考ふべくもないのである。彼にとつての偉大なる先行者芭蕉の世界に憧憬し、ひたすら之に追隨した蕪村であつた事は蔽ひ難い事實である。芭蕉への復歸を理想とした蕪村の俳諧上の言説は、とりも直さず、彼の芭蕉俳諧觀であつた事に何等の疑ひもない筈である。事實、此の去俗論を讀む時は、芭蕉が「笈の小文」に冕した一文を思ひあはさずにはゐられない。(此事は小宮豊隆氏も既にふれてゐられたかに記憶する)中にも、「見る所花にあらずといふ事なし、思ふ所月にあらずといふ事なし。思ひ花にあらざる時は夷狄にひとし、心花にあらざる時は鳥獸に類ひす。夷狄を出、鳥獸を離れて、造化にしたがひ、造化にかへれとなり。」といふ一文は、蕪村の離俗論の母胎のやうに思へる。云ふまでもなく、此の一文の意味する所は決して、蕪村に依つて見られた如く一面的に受取るべきではない。けれども、さび、しをり、をば逃避的に半面的に眺めた蕪村が、「笈の小文」の一文を斯く解釋する事に、何の不自然も感じられない。「句を得ることは専ら不用意を貴ふ。」と述べてゐるが、私は何となく芭蕉の、氣さき、心頭、の説即「氣さき

を以て無分別に作すべし心頭に落すべからず。」(柿晋問答)を思ひ出す。此説が、また蕪村に響いて不用意の説となつたものではなからうか。氣さきを以て無分別に作せよといふ芭蕉の見解は、更に一端的な強烈さを以て見直されねばならない意味のものであらうが、こゝには只、蕪村の芭蕉俳諧觀を、より明かにする意味から興味深く思ふ。

蕪村に依つて眺められた芭蕉俳諧は、斯くして、ひたすらなる世俗的なるものからの離脱によつて到達し得る無可有郷であつた。あやしくも美しい美の殿堂であつた。そして、之がより多く蕪村独自の俳諧の世界を語るものであるやうに思はれる。といふ事は、以上の蕪村の言説を通して、凡そ誤りなきものであらうし、尙又是を支持するに足る蕪村の言葉は、他に求むるに難くはない。「取句法」には、「知俳諧之大道無他。嘯月賞花使遊心於塵寰外常友蕉翁其嵐之流亞專以脫俗氣爲最。」と説いてゐるし又、「二見形文臺に次の如き事が記されてゐる由である。「今ことく其繁を省き疎を尙ふ、又是蕉門の一變。」而して之に添へた路景宛尺牘の添書に、「蕉門の流行ますくさびしをりを尙ふ是則畫家に云ふ繁を省き疎を尙ふものと致きを一にす」と述べてゐる。暮雨巷の句に協をついだ辭に於ては、「よみゝるに悲テ壯也、よく老杜か妙境に人レリ、乏して貴し、よく蕉翁の幽懷をさくれり。」と言つてゐる。まだ之等の外に徴すべきものはあるが、こゝに其の要を認めぬ故に省く。われわれの見る芭蕉と、蕪村の見た芭蕉とは、要するに、同一の世界には許し難い。言を換へるなら、芭蕉俳諧と蕪村俳諧と、両者は各々独自の世界を有つてゐたといふ事は、以上を以て明斷されていふと思ふ。

こゝに於て、更に一つの問題が浮んで來なければならぬ。即ち、蕪村は芭蕉と異なる世界に在り乍ら、又異なる解釋を俳諧に持し乍ら、自らその相異なる事を認識し得ずに終始したか。自ら持する見解が、自ら實現する俳諧が、

正しく芭蕉のそれに通ふものなるを信じて、心中何の疑惧をも抱かなかつたか。といふ問題である。安永二年に、蕪村が曉台に遣したといふ尺牘が残されてゐる。之に於て、蕪村は次のやうに書送つてゐる事が見られる。「拙老はいかいは敢て芭蕉之語風を直ちに擬候にも無之、只心の適するに隨きのふにけふに風調も違ひ候を相樂み、尤ヘンジャクか醫を施し候様に所々に而氣格を違へ候事に御座候。此たびのはいかにも愚眞面目の所には無御座候。賢兄實にはいかいの伯樂此所御鑒察可被下候。」此の蕪村の言葉は、一面に於て、如何に彼が芭蕉俳諧に關心を有つてゐたかを有力に物語つてゐる。と同時に、又一面では、芭蕉俳諧とは離れた蕪村独自の俳風を主張してゐる。尤も此の手紙の性質上、殊更蕪村俳諧の權威と特異性とを、尾張なる曉臺に示し度い心持もあつたらう。ともあれ、蕪村の心の一隅には、蕪村独自の世界を自覺し、此の世界に住し且之を擴充して行きたい欲求の動き初めてゐる事を、此一文に於て認めねばならない。尙ほ、これより約十年後、蕪村は花鳥篇にて云ふ「おのれかこゝろさし賤陋にして、寂しをりをもはらとせんよりは、壯麗に句をつくり出さむ人こそこゝろにくけれ。かの伏波將軍か老當益壯といへるそ、よろつこの道にわたりて、致を一にすへし。古市河栢筵今の中むら慶子などは、よくその道理をわきまへしりて、としくに優伎のはなやかなるは、まことに堪能の輩と云へし。」此の一文に於ても、全く前と同一の事が言はれると思ふ。たゞ、さすがに彼が他界の前年、前の文とは十年の後であるだけに、自覺の世界が隔段の明瞭さを加へてゐる事は看過し難いであらう。兩々併せ見るに、蕪村の晩年十數年の間には、蕪村が從來自己派な解釋を下して追隨してゐた芭蕉の世界が、漸く自己の描ける世界と相異なるものなることを覺り初め、一面自己の世界の圓熟と共に、眞直に自己の俳諧への大道を歩み続けようとの自覺が、開けつゝあつた事を明かに語つてゐる。こゝに於て、然らば、芭蕉の世界と異

なるを覺つた蕪村は、芭蕉を捨て、自己に還つたかといふに、必ずしもさうではなかつた。右に擧げた二文でも分る通り、一面に於てはやみ難い芭蕉への尊信を示してゐるし、几董の「から檜葉」によると、「かうやうの病に觸つても、好子道のわりなくて、句案にわたらんとするに、夢は枯野をかけ廻るなどいへる妙境、及ぶべしとも覺えず。されば蕉翁の豪傑なる事、今はた感に堪ざるは」と嘆じた事が語られてゐる。蕪村は、芭蕉と自己と、遠く離れた世界に住する事を自覺し初めてからも、尙ほ芭蕉の世界への憧憬は持し續けてゐた。こゝに芭蕉の世界に對する蕪村独自の世界の自覺は、同時に、芭蕉俳諧への蕪村の全的な解釋を意味する事にもなる筈であるが、併し蕪村が果してわれわれの満足するやうな解釋の下に芭蕉の世界から離れて自己の世界に還り、自己の世界から更に新に芭蕉の世界に向つて憧憬したのであらうか。此の邊は甚だ明瞭ではない。が恐らくは先に擧げたやうな、逃避的な、半面的な解釋を持ち續けてゐたのではなからうか。たゞ芭蕉の、あの風雅に徹した世界、柱杖一鉢に命をむすぶ抖擻行脚の境涯をば逃避に徹し、半面に徹したものと見て、到底自己の及び難いもののやうに思ひ、然るが故にやみ難い憧憬を持し續けたのではないか。追うて及ばぬものを追ひ續けるよりは、ほしいまゝなる自己の世界に安住する事が、蕪村にとつて遙かに恰適な、愉快な世界であつたに違ひない。追うて及ばぬ世界を實現したものの故に、芭蕉俳諧は、何故か蕪村の氣持にそぐはぬうらみがあつた。凡そ斯うした境涯、斯うした世界に相對立する境涯に生き、相對立する世界に住したき本然を持つてゐたのが蕪村であつた。

以上の如く考へて來て、こゝに思ひあはされるのは、蕪村の磊落自由の見解である。蕪村は元來が跌宕不羈の人であつたらしい事は其の俳諧上の言説を通して明かである。安永三年、「むかしを今」に序した文には「夫俳諧のみち

や、かならず師の句法に泥むへからず、時に變し時に化し、忽焉として前後相かへりみざるかことく有へしとそ。予此一棒下に頓悟して、やゝはいかしの自在をしれり。されは今我門にしめすところは、阿叟の磊落なる語勢にならばす、もはら蕉翁のさひしほりをしたひ、いにしへにかへさんことをおもふ。」と述べてゐる。蕪村がその昔、巴人に師事してゐた頃、かの石町夜半亭に於て巴人から示された所を、泌々追懷してゐる所に見て、彼が磊落自由の見解に就ては、深く巴人に教へらるゝ所があつたらしい。といふ事は、蕪村の中にひそむ根本的なるものが、如何に力強く巴人に依つて啓發されたかといふ事に他ならない。斯うして蕪村は己が内なる此傾向を助長し、且つ之に導かれて、終に抜き難い信念に迄高めてゐたとも思はれる。先に擧げた安永六年の「春泥句集」の序に於て、蕪村は又斯う説いてゐる。「或日又問、いにしゑより俳諧の數家各々門戸を分ち、風調を異にす、いつれの門よりして歟、其堂奥をうかゝはんや。答曰、俳諧に門戸なし、只是俳諧門といふを以テ門とす。又是畫論曰、諸名家不分門立戸、門戸自在其中。俳諧又かくのとし、諸流を盡してこれを一囊中に貯へ、みつから其よきものを撰ひ、用に隨て出す。唯自己ノ胸中いかんと顧るの外他の法なし。」蕪村の俳諧修行上の態度は實に此の言葉に盡きてゐる。取つて以て己が向上に資する爲には一切を辭せず、然るが故に一切に執する所なく、頼むところは只自己の内なるものであり、希ふところは只是を育み高める事であつた。極言するならば、蕪村にとつて一切は師であり、一切は慊らない殘像を持つてゐた。かの「取句法」に於て「其角之豪壯。嵐雪之高華。去來之眞卒。素堂之洒落各可法。麥林支考雖句格賤陋各々爲一家。亦有可取者。」と説いてゐるのも此の信念の現れであり、俳中の李青蓮と推賞した其角に就てすら、「大かた解しかたき句のみにて、よきとおもふ句はまれくなり。」「百千の句のうち、めてたしと聞ゆるは二十句にたらず覺ゆ。」

(新花摘)と評せざるを得なかつたのも、亦斯うした立場から眺められねばならない。先に擧げたやうな子規の言葉は、蕪村への一面的な見方から出たものと思はれる。「月の御句朱雀鬼おもしろく承り申候、尋常の事はおかしからず候。」と斷じ、「ばさと云響き古傘ニ取合よろしき敷と存候。何ニもせよ人のせぬ所ニて候。」(何れも兒童宛尺牘)と嬉しがるのは、要するに、一切を師として己が内なるものを高めてゆかうとするの蕪村の信念の逆りと見るべきであらう。先に擧げた曉臺宛の手紙に於て蕪村の述べた言葉も、安永九年「俳諧桃李」に序して、「夫俳諧の活達なるや、實に流行有て實に流行なし。たとは一圓郭に添て、人を追ふて走るかことし。先んずるもの却て後れたるものを追ふに似たり。流行の先後何を以てわかつへけむや。たゞ日々におのれか胸懷をうつし出て、けふはけふはいかにして、翌は又あすの俳諧也。」と語つてゐるのも、等しく彼の信念が言はせた自然の言説であると思ふ。で、若し斯うした心持、斯うした信念が、次第に推し進められ、高められてゆくとした時はどうであらうか。行きつく所は蕪村の所謂自得の俳諧の世界であり、俳諧最高の領域でなければならぬ。そして其處には、其角も嵐雪も素堂も去來も鬼貫も、はた何れの世界も、既に包攝され盡した、到らぬ事遠き世界となる筈である。大先人芭蕉の世界に就ても同じ事が言はれる。だが、天は蕪村に假すに十分なる齡を以てせず、深いなげきの中に去つて行つた。只彼が此の藝術的意欲の幾分を實現したに過ぎなかつたとは云へ、此の彼の歩みの跡は、私をして右のやうな事を言はしむるに足るのであつた。蕪村は芭蕉の世界に對つて、終始憧憬を持ち續けはしたけれど、既に、先に擧げたやうな、芭蕉の世界に對立的な言葉を放たずにもゐられなかつたといふ事は、やがて、蕪村の斯うした進展の過程を語るものであると思ふ。蕪村が如何なる程度に芭蕉の世界を解釋してゐたかは、結局明瞭にし難い事であるが、芭蕉俳諧の世界への尊信

は臨終まで離れなかつたのは否み難い。けれども、又一面、以上述べ來つた如き磊落自由の態度、彼の根本的信念の擴充されゆくところを望み見る時に、先に擧げたやうな心持が蕪村によつて語られたのは、當然の過程で、何等異とするに足らぬと思ふ。之を要するに、蕪村は、恐らく跌宕不羈と見られるまでに、自己の希求する俳諧の世界の探求欲を秘め、之が實現過程に於て、磊落自由な態度を持してゐた。其角に對し、嵐雪に對し、素堂、去來、鬼貫、其他凡てに對し。そして又芭蕉に對しても。只併し乍ら、芭蕉の世界は蕪村にとつて、未だ遠く及び難いものゝ如く思はれた。といふ意味は、恐らくは、芭蕉のあの釜魚飯塵の愁から徹底的に離脱したかの如き境涯に即した、即ち逃避に徹したといふ意味に於てではあらうが、終始憧憬を持ち續けたと見る外はない。とは云へ、其の芭蕉に對してすら、晩年に臨むにつれ、可なり著しく自己の世界の主張を向け初めてゐたのであつた。

三

蕪村が俳諧上の識見の程は、以上の如く迎ふる事によつて、略々之を明にし得るであらうと思ふ。此の識見を、蕪村は作品の上に於て如何に實現し得たであらうか。芭蕉の俳諧は、その生涯を通じて幾度かの變風が考へられるのであるが、蕪村に在つては、固より時代的に其の圓熟の程度に幾分の差異は認め得るも、蕪村俳諧の本領は、終始變る所がなかつたといふに不可はないであらう。而もその大部分の發句並に連句は彼が晩年即ち俳人蕪村の最も圓熟せる時代に於ての作品であつた。従つて蕪村の俳諧を鑑賞吟味するにあつて、年代的に作品を考覈する事は、殆んどその要を認め難く、凡そ一律に之を取扱ふ事によつて俳人蕪村の面貌を窺つていゝ筈である。

先づ發句に就て見るに、蕪村が作句の上に於て、甚く芭蕉に追隨した跡が見られる。「夕からす秋のあはれを告にけり」の句境は、芭蕉の「枯杖に烏のとまりけり秋の暮」から通うて居り、「辛崎の朧いくつそ與謝の海」は「唐崎の松は花より朧にて」をふまへてゐる。「春惜しむ宿やあふみの置火燵」は直ちに芭蕉の「行春を近江の人と惜みける」を思はせるし、「憂我にきぬたうて今は又止み子」を讀む時自ら思ひ浮ぶのは、芭蕉の「砦うつて我にきかせよや坊が妻」であり、「うき我を淋しがらせよ閑古鳥」である。一々こゝに摘出の要を認めぬが、蕪村の發句を通覽する時、その句境に於て、又その格調に於て、或は芭蕉の句をふまへ、或は芭蕉に教へられたと思はれるもの極めて多く、芭蕉廻顧の顯著なるに氣づくのである。固より斯うした見方に立つ時は、芭蕉以外に他の多くの俳人の投影を蕪村の句の上に認めない譯にはゆかないが、就中芭蕉の影響の尤なる事も亦否み難い事實である。だが併し、芭蕉からヒントを奪ひ、句法格調を學んだ事それ自身よりも、斯くして實現された句の價値如何が、寧ろ問題とさるべきであらうが、由來、斯うした場合の作品に、却て新鮮な價値を見出す事の至難な事は、過去の様々な文學作品がわれわれに教へてゐる。蕪村の場合に於ても、蕪村の依據した芭蕉の句の價値をうすめるに足る程のものは絶無と云ひたい。蕪村の發句に於て芭蕉廻顧の顯著な幾多の句は、恐らくは芭蕉に追隨せんとした事實の故に、その價値の大半は滅殺さるべきものが多いやうである。それはさて、蕪村自らは此の事を如何に考へたのであらうか。既述の如く、蕪村は芭蕉を追慕し、芭蕉俳諧の再現を以て理想とした事が蔽ふべからざる事實である以上、蕪村の俳諧に芭蕉の影響が濃厚であるとしても、何等異とするには足らない。殊に又、己が俳諧の向上の爲には一切の門戸を認めず、廣く先人に學ぶ所あらむとし、中にも、芭蕉は諸家を包括するものと考へ、己が俳諧の最高の指導者と考へてゐた蕪村であつ

た。芭蕉に倣はんとしたのも當に然るべき事であらう。「しくるゝや我も古人の夜に似たる」「門を出れば我も行人秋のくれ」蕪村の心の一面には、古人への追隨に、何とはなき喜びが動いてゐたやうにも思はれる。事實、蕪村の句には、右に述べたやうな芭蕉模倣の跡を明かに句面にとどめた價值のうすいもの以外に、格調はあく迄も蕪村風であり乍ら、餘情に於て、脈々と芭蕉俳諧の心に通うてゐると思はれるものが甚だ多い。

春の夜に尊き御所を守身かな

行春や撰者を恨む哥の主

わりなしやつはめ巢つくる塔の前

雁行て門田も遠くおもはるゝ

鮎かれてよらて過行夜半の門

負ましき角力を瘦物語かな

戸に犬の寝かへる音や冬籠

斯うした一類の句を拾へば夥しい數にのぼるに違ひないが、一々こゝに摘出の要を認めぬ。ともあれ、蕉風の再現を以て理想とした蕪村の一面を首肯せしむるものであり、渾然たる格調と相俟つて、蕪村風の一斑を語るに足るものであらうが、未だ蕪村風の本領を以て許し難いと思ふ。蕪村が、斯る境地以上に出でず、何等かの意味に於て蕉風模倣者としての蕪村を示すに止まつてゐたとすれば、蕪村は、或は單なる蕉門の徒として俳諧史上に名をとどめたかも知れないが、異色ある俳風を以て一時期を劃するなどいふ事は到底望み得なかつたであらう事も、極めて見易いところ

ろである。けれども蕪村は既述の如く、俳人としての意欲に於ても、決して終始不變の忠實なる芭蕉追隨者ではなかつたし、作品の上に於ても亦芭蕉とは異なる俳諧性を賦與された作家であつた。寧ろ芭蕉とは對蹠的な世界に住する作家であつたと云つていゝのである。以下順を趁うて此の點に觸れてゆかうと思ふ。蕪村の發句を通じて、そこに見らるゝ特異性は、先づ二つの大きな範疇に片づける事が出来る。

第一類 知覺的なるもの

言ふまでもなく、言語それ自身は知覺的には無價値であるが、句に取入れられた表象が鑑賞者の想像を刺戟して明瞭なる印象を描かしむる點に於て獨自的なるが故に、斯く稱するが最も適當である。即ち、或は視覺に訴へ、或は聽覺を動かし、時には之等が互に渾融し、又時には更に捕捉し難い壓覺を伴ひ、専ら官能の世界に外象を染出す事によつて特殊な美を實現せんとするものである。

春 雨 や も の か た り ゆ く 簑 と 傘

夕 風 や 水 青 鷺 の 脛 を う つ

禪 に 團 扇 さ し た る 亭 主 か な

の如き一類の句は、正に此の傾向を代表するものと云へると思ふが、さすがに、視覺的な句が數に於て最多いやうである。聽覺的なものを求めても、

時 鳥 琥 珀 の 玉 を な ら し 行

イめは遠くも聞ゆかはつかない

月今宵めくら突當り笑ひけり

など其數もなか／＼少くはない。が、然らば斯うした句を以て、何故に私が蕪村風俳諧の本領として許すか、此點に就て少しく述べておかなければなるまい。

凡そ如何なる場合に於ても、われ／＼が美の世界を味識しつゝある時には、われ／＼は愉快感を覺える。われ／＼のあらゆる機能が満足されるにつれて、愈々その愉快感が高められ、強められ、深められる。之と反對にわれ／＼の機能的要求が満足されなければそれだけわれ／＼の感得する美の世界は縮少され輕減される。同じく一杯の牛乳を飲むにしても、身は登臨の快を恣にし乍ら傾ける一杯の方がどれだけ美味であらう。文學的美の世界でも何等之に異なる筈はない。詩歌にしる、小説にしる、讀んでわれ／＼の知的機能を滿さないものは、何より先づ、われ／＼の美感を動かし難い。畢り、わからないものは面白くない。従つて、一躍われわれの情的機能を衝いて、深切なる美的機縁とはなり得ないのである。蕪村は、其角の句の難解なるを批評して「大かた解しかたき句のみにて、よきとおもふ句はまれ／＼なり。それか中に世に膾炙せるはいつれもやすらかにしてきこゆる句也。されは作者のこゝろにこれは妙にし得たりなとうちほのめくも、いとむつかしく聞えかたきは闇夜にしき着たらん類いにて、無益のわさなるへし。」と述べてゐるのは、此の消息を語つて妙であらう。此の蕪村の言葉は、たゞ難解な句に投げられたもので、知覺的にも知的にも、そして又感情的にも、その要求が十足されないものを云つたのであるが、ともあれ、知覺的にしる、知的にしる、何れわゞ十分に滿された場合には、文學的表現である限り、われ／＼はそこに美を味ひ得る。而して又此の

美にも、單に知的に或は知覺的に止まるものと、逆に感情の世界にまで發展擴充されるものがあり、別に又、直ちに感情の世界に訴へる場合もある。芭蕉俳諧にあつては、知的、知覺的の兩要求の満足感を越えて、直にわれ／＼の感情の世界に迫る事によつて、特殊な美が感得さるゝに反し、蕪村俳諧に在つては、固より先述したやうな、芭蕉の流れを汲む一類の句もあるが、知覺的、知的の兩要求を滿す事によつて、芭蕉俳諧に於て全く見られなかつた獨自の世界を實現し得てゐるのである。斯うした世界の實現に於て、芭蕉以前に、又芭蕉以後に、蕪村の先蹤を見ない。來山や凡兆や、或は酒堂あたりには、その格調や、蕪村に通ふものもあるが、私がこゝに蕪村風の本領として擧げた一類のものと比較して、到底同列には許し難いものであり、假令蕪村を凌ぐ一句二句を残したとしても、蕪村の獨自性を曇らせるには足りないし、且又、蕪村の意中之等の俳人は影をだに落してはゐなかつた。私が、先に擧げた知覺的なる句を以て、蕪村俳諧の特異性として許す所以である。

扱て、右に擧げた句に就てゝあるが、之等を讀んで、われ／＼は、情感の尾を曳く何らかを感じるであらうか。潔くも鮮明な格調と印象とは、それ／＼の特異な美をわれ／＼に刺戟するが、それだけに、餘情を持たず、句はそれ／＼の世界に、鮮かに靜かに自足してゐる。更に云はゞ、芭蕉の句には、外象に對して動いた芭蕉の心があつたに反し、蕪村の句には蕪村の對した外象がさ乍ら染出されてゐる。之を、寫實的と云ふやうな一般的な言葉で説き得るかも知れない。ともあれ、句に取入れられた外象の世界は、それが手際よく鮮明であればあるだけ、時處に限定された外象の個有性が明瞭となり、従てわれ／＼の感興を愈々深めるわけである。此の、時處に限定された外象の心となり切る事によつて、蕪村の心はわれ／＼の心を動かすのである。蕪村二家の俳諧が、其の本領に入るにつれて愈々上述

の如き特異性が明かになる。例へば、「いはりせし蒲團ほしたり須磨の里 蕪村」「蛸壺やはかなき夢を夏の月 芭蕉」を並べ味つてみる時はどうであらうか。風光の須磨に、いばりの蒲團を點出する特殊の句境、之に對するに、芭蕉の句の持つ縹渺と傳はりゆく音樂的な情調は、やがて兩者の根本的な相違を語るものでなければならぬ。

蕪村風の一半を領する知覺的な俳境は、右の如き句に於て最も鮮明に見得るやうに思ふが、更に、知覺的に外象を染出してゐて而もあやしきまでに外象を繞る雰圍氣を傳へる事に依つて、特異な句風を成してゐるものがある。

春の海終日のたりく哉

てらくと石に日の照枯野かな

鰯汁の宿赤くと燈しけり

の如き一類である。之等は一見前述のものとは異なる所はないやうにも思へるが、なほ兩者同列には見るべからざるものを秘めてゐる。前述の場合には、句に現れた外象が、いつ迄も知覺の世界に印象づけられて動かぬやうな感じであるが、此の場合のは、外象それ自身の知覺的印象はやがて消え去つて、あやしくも美しい雰圍氣の世界に鑑賞者を奪ひ去るものあるかに感ずる。言を弄するならば、知覺を融合した、官能の彼方に或不可思議な官能の世界を開いてゐるとでも云ひ得るかも知れない。知覺されるものは先づ、單調な併し力強い浪音であつても、われくの美意識を捕へるものは、終に、春が齎す不可思議なる官能の動きである。單に、浪の姿、入日の色、赤くともされた灯、といふのみならば、固より平凡ではあるが、斯る知覺の對象を拉し來つて斯く迄に特殊の美を實現し得た所に、蕪村の獨自性があつた。而して是を前述の場合と比較するに、彼は繪畫的な知覺の世界を主とし、此は或處の或時の浮動せ

る雰圍氣を主としてゐる。従つて構造の上に於ても亦相異なるものが見られる。即ち彼に於ては何れかと云へば表象の數が多かつた。春雨―簑―傘、であり、風―水―鷺、であり、禪―團扇―亭主、であつた。が此場合は極めて少い表象を持つに過ぬない。十七音句に於て、表象を多くすればそれだけ表象の世界に誘はれ易く、雰圍氣の動きを表現する餘裕を少からしむる事は云ふを俟たないであらう。従つて此比較上の事實は、又芭蕉の句の代表的なものと、蕪村のそれとの比較に於ても當然認められる筈である。固より例外はあるとしても、

夏草やつはものどもの夢のあと

病雁の夜寒に落ちて旅寝かな

折々に伊吹を見てや冬ごもり

とやうに極めて尠いのが一般の傾向である。芭蕉は門下の洒堂が多くの表象を取入れる傾向あるを誠めて、こがねを打のべたる如くあるべし、と云つたと傳へられてゐる。外象に對した時、そこに動く己が心を凝視し、句に取入れられた表象は、その心を暗示する爲の機縁に過ぎない芭蕉の俳諧に、上述の如く蕪村と反する傾向の認められるのも亦異とする迄もないが、然らば、前述した雰圍氣を主とした場合の句の傾向と芭蕉俳諧の場合とを並べた時は如何であらうか。兩者同じく句の表象は少くとも、芭蕉の場合の場合にはあく迄も己が心の表現を理想とするに反し、蕪村の場合には、あく迄も外界に動く雰圍氣の表現に理想が向けられてゐる。芭蕉の句に於ける表象は芭蕉の心を暗示する爲の機縁に過ぎず、蕪村の句に於ける表象は、此の場合、表象を繞る雰圍氣を染出す爲の機縁に過ぎない。従つて、同じく表象を少くすとも、句の生きる世界は、彼此各々相異なるを知らなければならぬ。

外界の景趣や事象を表現するにあたり、芭蕉の立場を踏襲するものでなければ、蕪村風に據るの他はなからうが、同じく蕪村風に據るとしても、前述の二様の場合が先づ考へられるであらう。併し蕪村の發句には、更に今一つの獨自的な世界が見られる。即ち同じく知覺を機縁とする事は上述と同じであるが、現實的な景致や雰圍氣に止まらずして豊麗自在なる聯想を驅り、奔放不羈なる空想に乗つて、非現實的な怪異美の世界に遊ばんとするものである。

蝮の 躰も 合歡の 葉蔭哉

草枯て 狐の 飛脚通りけり

河童の 戀する 宿や夏の月

のやうな世界が即是である。上述の二つの場合以外には、知覺的に探るべき美の世界が無い故に、意識して此世界に躍進したのであらうか。恐らく性格的に、蕪村は異狀な關心を狐狸の怪に對して有してゐた。それは、一種の驚怖であり更に多くの興味でもあり不可思議でもあつた。之等の事實が、時あつてかあやしくも蕪村の官能を刺戟して斯うした或怪異美の世界を實現せしむるに至つたのであつた。斯る世界の性質であるだけに、句の數もさして多くを數へる事は出来ないが、而もなほ以て俳人蕪村の獨自性を語つて逸し難い一面であると思ふ。蕪村にとつて、まことに惠まれた偶然であつた。

第二類 知的内省的なるもの

言ふ所の意味は、これが創作に於てもまた鑑賞にあつても、知的要素を除外し、知的内省を俟たずしては不可能

なるものを指稱する。芭蕉の場合の如き心の俳諧でもなく、又蕪村にしても、前半に述べたやうな立場でもない。即ち、直ちに感情を動かさんとするものではなく、知覺的機能を通じて美を把握せんとする立場でもない。直接には知的機能のはたらきを俟つて藝術的美の世界を開かんとする立場に外ならなかつた。云ふ迄もなく文學は音樂に比して遙に多く知性に依據するものであり、同じく文學に於ても、芭蕉に見られたやうな音樂的なるもの、乃至は前述せる蕪村の感官的なるもの等は、比較的速に情的機能に迄進み得るも、此の場合に在つては知性に俟つ事甚だ多きが故に、先づ表現せられたる意味の世界を完全に理解し且つその理解を進展せしめ得る境に至つて初めて情的なる領域が開け美の世界が開けるものである。斯く知性の媒介による所多き内容を十七音句の如き最短詩形に表現せんとするは藝術としての純粹性に遠かるべく、發句の價值としても甚だ高きを期し難いであらう。けれども蕪村の詩才は此の方面に迄進まずにはゐなかつた。そして、曾て貞門や談林に於て餘りに屢々見られたやうな單なる知的遊戯の世界より脱却して、能く夫々獨自の匂ひと色どりとを持つた美の世界を見せてゐるのである。尙ほこゝに於て、私が知的内省的なる一類を掲げる事に依つて、蕪村風の一半を語らうとする所以に就て、述べておく必要がある譯だが、略同様の事を既に前段觸れる所があつたから、こゝにその重複を避けようと思ふ。

扱て此の部類の句に就て見るに、やはり前と同じく、稍傾向を異にした數類を認めざるを得ない。先づ擧げねばならないのは、故事故語を踏襲した一類、所謂古典主義に立脚したものである。由來、古典主義文學の齎す魅力は、

1. 遙かなる歲月の經過それ自身が一種の懐しくも崇高なる美を以て鑑賞者に迫ること。
2. 古典的な事象なるが故に、豊かなる意味とニュアンスの世界を以て鑑賞者を動かすに足ること。

の何れか、或は兩者の交錯に繋つてゐると思はれる。従つて發句の如き短詩形に之を取入れる事の極めて効果的な事も自ら考へられる。古典主義傾向に向ふ動機として、當代藝術の衰頹より徒に往時の盛大を廻顧せんとするに至る場合多く、こゝに、従つて又、弊害の多くを宿してゐるのであるが、それは姑く措き、古典主義文學の齎す魅力は右の二つの場合を多く出でない。燕村以前の俳人も亦多く之に據る所があつた。又敢て古典主義とは云へないとしても、かの歴史的吟詠の如きも、主として右の場合とその美の世界を同じうするものであらう。何れにするも、燕村以前にあつては、一讀直に情感を動かす點に於て、明に燕村風と相對立してゐる事が思はれるが、燕村の依據する古典主義には、又蔽ふべくもない燕村風が看取されるのである。

白梅や墨芳はしき鴻臚館

足跡を字にもよまれす閑古鳥

妻居士は固い親父よ竹婦人

くれの秋有職の人は宿に在す

忘るなよ程は雲助ほとよきす

等によつてその一斑を窺ふに足る如く、之が創作に際しては固より、鑑賞者も完全なる知的内省なくしては到底之等の句に感興を見出す事は不可能であらう。燕村以前の斯る傾向の句との相違は、主として情趣的と知との相違である事は既に云つた。即ち、燕村以前のものとは先述した二つの場合の前者に偏するものであり、燕村に在つては、何れかと云へば、後者に傾くものと云へよう。同じく故事故語を踏襲しても、燕村の獨自性はまた明に認められねばならな

い。而して、斯る知的領域を完全に開拓し且つ更に之を進展せしめ得るに至つて初めて美を把握し得るものたるは先述の通りである。

次に著しいのは、對句とか、縁語、掛詞に依る一類である。之は形式的な技巧を示すに過ぎないものであらうが、併し單に縁語を借り、單に掛詞を用ひたと云ひさるには餘りに知的趣味に傾いてゐる所に、蕪村の俳諧性が鮮やかに投影してゐる事を知るのである。

先づ對句を取入れたものを見るに、凡そ眞の對句は、内容形式に亘つて或特殊な平靜美・調和美・繪畫的美を漂はすものであるが、蕪村の場合に於ても、亦單に形式的な對立のみに止まらず、巧に内容に迄亘るものを見るのである。

釣鐘にとまりて眠る胡蝶哉

みじか夜の闇より出でて大井川

等はどうであらうか。一見感官的な美に過ぎぬものゝ如くにも思へるが、併し、唯單に胡蝶のとまつて眠れる、大井川の流れる、とのみならば餘りに凡に過ぎる。乃ち、可憐な一匹の胡蝶に對するに大きくグロテスクな釣鐘を配し大井川に對するにみじか夜を以てしたものと見ねばならない。何れも知覺的に把握さるべきものであつても、そこには以上述べたやうな知的要素の介在する事を度外視した鑑賞は、斯うした一類の句に臨む所以ではなからうと思ふ。

縁語について見ても、

葛を得て清水に遠きうらみ哉

あだ花は雨にうたれて瓜畑

等に於て、單に斯る句の意味するやうな場合の經驗から自ら生れた句と受取らば、蕪村風を解すべく餘りに皮相に過ぎる嫌があらう。少くとも、葛に配するにうらみを以てせる、あた(仇)に對してうたれを忘れぬ用意を看過してはならない。

掛詞に就て見るに、

橘のかことかましき裕かな

愚痴無知のあま酒造る松か岡

など、固より蕪村の知的に敏なる作用を露してゐるとしても、掛詞といふ修辭の一點よりしては、特に蕪村風を云爲するにはあたらなひであらう。けれども、そこには同時に故事を踏へ、故語を捕へてゐる所を併せ吟味する時、また軽く見遁すべきでもあるまい。

洒落・滑稽に就ては、

錢龜や青砥も知らぬ山清水

やふ入の夢や小豆の煮るうち

ひへ鳥を廿チ重ねて雲雀哉

獨鉆鎌首水かけ論の蛙哉

蓼の葉を此君と申せ雀鮓

などの一類が見られるし、

蕪村の俳諧

學問は尻からぬける螢かな
大とこの糞ひりおはすかれの哉

の如き手法も尠くない。洒落にしては、何と複雑な洒落であらう。何と知的なそして又難解な洒落であらう。滑稽にしては、何と巧妙な滑稽であらう。尙又、前者即ち洒落の數句に於て見らるゝ如く、故事をふまへ故語を弄する所は、既に述べた一類と變りはないが、而もなほ、洒落的要素を以てより力強く彩られてゐる。同様に、後者即ち滑稽の句に於ても、對句的な手法に據るものであらうが、句としての面目は、滑稽を以て立つものと見なければならぬ。

以上の如く、蕪村風發句の特質をば、美的把握の過程に即して知覺的・知的内省的の二つの立場から眺めて來たのであるが、尙ほ蕪村風發句を曠なく訪ねる時は、以上二範疇を以て蔽ふに躊躇するやうな句を見出すであらうが、これ等とても、芭蕉風に見らるゝ主情的なるものに比すれば、寧ろ疑もなく以上の二方向の何れかに對つてゐることが分る。主として芭蕉風乃至は芭蕉風を趁ふ流派と比較的に論ずる時、蕪村風發句の特質は以上を以て明かに認めらるであらうし、芭蕉風以外の諸流派に於て、或は知覺的・知的内省的なるものが見られるとしても、そこには餘りに多くの挾雜の分子があつた。之等諸流派から、或は遊戯的な、或は即興的な、或は幻惑的な又或は理窟的な、さまざまの挾雜物を完全に濾過する事によつて、明晰さ純一さを増し、艶麗さ典雅さを加へ、獨自的な藝術美の世界に颯爽たる風格を備へて自得せるものゝ如くに思はれるのが蕪村の發句である。而して、之が美的把握の過程に即して論ずる時は、以上の如く知覺的・知的内省的の二範疇を以てするの外はなく、且又蕪村風を語るに最も便宜的であると思ふ。

更に進んで蕪村独自の修辭的技巧や、素材に就て多くの餘白を要するであらうが、以下簡略に觸れておきたい。凡そ文學的美意識の對象となる素材は、之を自然と人事との二方面に求むるの他はないが、芭蕉に在つては、かの中世連歌によつて樹立された幽玄の思想を繼承して、深く自然の心に悟入せんとし、句作の素材も多く自然に之を求めたのであつた。併し、蕪村は、自然に於てと等しく人事に之を求め、而も複雑な人事を巧に十七音句の短詩形の中に統一して特異の美を實現し得たのである。

主しれぬ扇手とり酒宴哉

御手討の夫婦なりしを更衣

などのやうな傾向の句を求めれば、其數少くはない。斯る一類が、先に述べたやうに、知覺的とも知的内省的とも明斷し難い傾向のものであらうが、詮ずる所、前者は知覺的、後者は知的内省的な過程を取るべきものであらう。特に前者にあつては、想像的要素多く、想像的知覺とでも云ふべきものに俟つべく、後者にあつては、物語的要素が見られ、まともある知的構成に俟つて、特異な美の世界が味はれるのであらう。

蕪村の修辭的技巧を精細に辿る時は、そこにも芭蕉模倣の跡が明に印せられてゐるが、こゝには略する。寧ろ彼ら句に一種の光彩を投げてゐる異體字餘りの一類こそ注目さるべきであらう。

蚊帳の内にはたる放してア、樂や

宮城野の萩更科の蕎麥にいつれ

雪の暮鳴はもとつてゐるやうな

の如き自在なる手法に至つては、果して完成されたものか、又は未完成なのか迷はざるを得ない。が、斯うした詮議こそ無用の沙汰で、そこにはたゞ沸々とたぎる彼が美的探求欲の渦巻を看取すれば足りる。こゝに至つては彼を役する何ものもなく、ひたすら自己の心の動くまゝに動いてゐる。かの磊落自由の態度が露呈されると見るの他はなし。

美的把握の過程に於て、取材の世界に於て、表現の技巧に於て、獨自的な豊かさを以て實現された美の眞實に關しては、様々な概念的判定が下されるであらう。固よりそれは鑑賞者の自由である。ともあれ、自然・人事を蔽ひ、濃淡疎密となく、明暗大小となく、美の諸相に訪ね入つて餘す所がなかつたのが蕪村の發句である。句は夫々獨自の美を實現し得てゐるとしても、底を流るゝ蕪村の俳諧性に變りはない。曇りなく高き相、遲疑する事なく、澁滞する所なき力、一言以て蔽ふならば、やはり、颯爽たる風格を備へたのが蕪村の發句であると云へよう。(嗣出)